

---

# スコルダトゥーラ=カルーナ

佐伯彩瑠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スコルダトゥーラ・カルーナ

### 【Nコード】

N5240T

### 【作者名】

佐伯彩瑠

### 【あらすじ】

夜、小洒落たバーで語る一組の男女。名もないヴァイオリンが導く思い出たち。

ぼくらと反対の位置のヴァイオリンを見て、少し思い出したことがあった。

「昔はね、ぼくヴァイオリニストだったんだ」

そんな大層なものではないけれど。

「本番直前に弦が切れちゃって」

特に調律もせずに弾き始める。音は未だに雲の中のような。

「一本ないまま演奏したっけ」

一回くすり、と笑ってから、弦に弓をかけた。どうやらぼくの周りに人が集まってくる。

アルカイク（＊１）な空気を孕む、幽玄の音色。これだけ綺麗なヴァイオリンは知らない。どれだけ調律が合わなくとも、錆びていても変わらない。

これは僕の繰る音楽より高貴なものになるう。天使のラッパ隊にだって劣るまい。

周りの群集の、感嘆の溜め息。ちょっとしたコンサートにぼくは酔う。

見えないスポットライトで照らし出され、弦が切れる寸前まで思い切り引いた。

結局アルペジオの最後に一弦がぷつんと切れてしまったが、人々は大喝采。

「聞きなれないあの曲は何？」

「特になんでもないよ」

19世紀以来使われることもほとんどなくなったスコルダトゥーラ（＊２）の奏法。ぼくは彼女の手をとってバーの外へと連れ出した。

「そうだ、今夜限りだけど君が名前をつければいい」

「私が？」

そう既に忘れていた部分が大半で、もう一度と言われてもできないが。

そのたった一つの曲を、捧げることになろう。

「カルーナ」

「カルーナ。今からそれは、君だけのものだ」

月夜道を二人ぽつんと影を合わせる。何だか今日は不思議な宵だ。もう一曲作れる気がする。

帰ったらアコースティックギターで何か弾こう。

ぼくは心に笑いかけた。

（後書き）

\*1 アルカイツク：古風

\*2 スコルダトゥーラ：弦楽器を変則的な調弦にすること。現在はほとんど用いられない。現在

\*3 カルーナ：ヒース。ツツジ科の低木エリカ属。色は白、淡紅など。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5240t/>

---

スコルダトゥーラ=カルーナ

2011年5月24日17時20分発行